



きた
鍛ほめ福岡メソッド

Fukuoka Kita-Home Method

実践の手引き

福岡県教育委員会

平成30年3月

～はじめに～

きた 鍛ほめ 実践3ヶ条

県教育委員会では、「福岡県学校教育振興プラン」(平成27年12月)に、子どもの学ぶ意欲や自尊感情、向上心やチャレンジ精神、勤勉性や逆境に立ち向かう心など、子どもが自律的に成長するための原動力となる人格的資質を育成するため、「鍛ほめ福岡メソッド」を教育に関わる全ての指導者等が共有する本県独自の指導方法として位置付けました。

そして、既に「鍛ほめ福岡メソッド」は、県内各地において多種多様な実践が展開されています。

そこで、更に実践が深まり、広がるように、「鍛ほめ福岡メソッド」の好事例の中から、実践のポイントを取り出し、整理しました。

それらを要約したものが「鍛ほめ実践3ヶ条」です。

この3ヶ条は以下のように、「鍛ほめ福岡メソッド」における3つの活動、すなわち、「目標設定の活動」「挑む活動」「振り返る活動」につきづつ位置付けられます。

子どもの活動	指導原則	鍛ほめ実践3ヶ条
目標設定の活動	鍛える	第1条 達成目標を引き出し、 子どもをその気にさせよう
挑む活動	のばす	第2条 プロセスを記録させ、 子どもの活動を支えよう
振り返る活動	ほめる	第3条 プロセスをほめ、 子どもの心に火を灯そう

本実践の手引きでは、「鍛ほめ実践3ヶ条」を中心に、実践のポイント等を具体例を交え示しています。また、それらのポイント等は学校教育の場面を中心に記載していますが、家庭や地域における場面についても記載しています。

この「鍛ほめ実践3ヶ条」を前提に、それぞれの実態に応じて「鍛ほめ福岡メソッド」を展開していくことで、創造性豊かな実践がこれまで以上に展開されることを期待します。

そして、「鍛ほめ福岡メソッド」が本県が誇る指導方法として確立し、進化し続け、学校・家庭・地域に「鍛ほめ文化」が根付き、広がることを切に願います。

最後になりましたが、本実践の手引きの作成にあたり、御尽力いただきました福岡教育大学教育学部教育心理学講座 生田淳一准教授をはじめ、関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

きた
「鍛ほめ福岡メソッド」実践の手引き

目 次

はじめに

I 「鍛ほめ福岡メソッド」	1
1 「鍛ほめ福岡メソッド」とは	2
2 「鍛ほめ福岡メソッド」推進のために	6
3 「鍛ほめ福岡メソッド」が必要とされる背景	10
II 「鍛ほめ実践3ヶ条」	13
第1条 達成目標を引き出し、子どもをその気にさせよう	14
第2条 プロセスを記録させ、子どもの活動を支えよう	15
第3条 プロセスをほめ、子どもの心に火を灯そう	16
III 「鍛ほめ」実践Q&A	17
IV 「鍛ほめ」実践事例	35
● 小・中学校の事例	36
● 高等学校の事例	39
● 特別支援学校の事例	40
● 社会教育の事例	41
V 知っておきたい動機づけの理論	43
VI 「鍛ほめ」実物資料	49
● 小・中学校の事例	50
● 高等学校の事例	52
● 特別支援学校の事例	53

Fukuoka Kita-Home Method

きた
鍛ほめ
福岡メソッド

1 「鍛ほめ福岡メソッド」とは

(1) 目的と方法

「鍛ほめ福岡メソッド」とは、子どもの学ぶ意欲や自尊感情、向上心やチャレンジ精神、勤勉性や逆境に立ち向かう心など、子どもが自律的に成長するための原動力となる人格的資質を育成するための指導方法です。

子どもの活動としては、指導者や子ども自身、またはグループや学級で、「①やや困難な目標や課題を設定し」、周囲の人から最小限の支援を受けながら何度も「②挑み」、その過程や結果を「③振り返る」という活動サイクルを基本的な仕組みとしています。

【コンセプト】 鍛えて、ほめて、子どもの可能性を伸ばす！

鍛えて（いろいろ試して解決したいと思う心やできないことをできるようになりたいと思う心を）

ほめて（取組の結果や取り組んできた過程を）

子どもの可能性（学ぶ意欲や自尊感情、向上心やチャレンジ精神、勤勉性や困難に立ち向かう心等）を伸ばす。

【仕組み】

【鍛える】

(2) 《挑む活動》

子ども一人一人または子ども同士のグループが、周りの人から最小限の支援を受けつつ自らの力で解決に挑む。

・不安感の払拭（注1）

【鍛える】

(1) 《目標設定の活動》

指導者、子ども一人一人または子ども同士のグループが、やや困難な課題や目標を設定する。

【伸ばす】

【ほめる】

(3) 《振り返る活動》

指導者が振り返りの場を設定し、指導者または子ども同士が、その頑張りをほめる、認める。

・安心感（注2）
・基本的信頼感（注3）

（※）【鍛える】上では不安感の払拭（注1）、【ほめる】上では安心感（注2）や基本的信頼感（注3）に留意する必要があります。

（注1） 不安全感の払拭：テストや学習に失敗することへの恐れや、成功しなければならないという緊張感、他人に評価されることへの心配といった過度の不安感を軽減すること。

（注2） 安心感：自分があるがままに受け入れてくれる他人がいるという感情。

（注3） 基本的信頼感：自分は他人に受け入れられる価値のある人間であるという自分自身に対する感情。

このプロセスにおいて、指導者が大切にすべき指導の前提が「鍛ほめ実践3ヶ条」です。

「鍛ほめ福岡メソッド」を展開する際、子どもがすること(学習活動)と教師等、指導者がすること(指導上の留意点)に分けて整理すると、次のようにになります。

子どもがすること	教師等、指導者がすること	指導原則
主な活動と内容	「鍛ほめ実践3ヶ条」と指導上の留意点	
1 目標設定の活動 チャレンジへの 気持ちを高める	第1条:達成目標を引き出し、子どもをその気にさせよう ※子どもがチャレンジへの気持ちを高めることができるように、子どもの状況に応じて、モデルを示したり、試しの活動を位置付けたり、これまでの取組を振り返らせたりする。	鍛える ↑ のばす
2 挑む活動 チャレンジし、 プロセスを記録する	第2条:プロセスを記録させ、子どもの活動を支えよう ※子どもが主体的にチャレンジを続けることがきるよう、発達段階や活動によって記録のさせ方を工夫したり、状況に応じて、目標を変更させたりする。	
3 振り返る活動 チャレンジの プロセスを振り返る	第3条:プロセスをほめ、子どもの心に火を灯そう ※子どもが次の目標を設定することができるよう、これまでの活動を振り返らせ、チャレンジのプロセスと結果をつなげて評価し、自他の努力の過程や心の成長等に気付かせる。	ほめる ↓

なお、「鍛ほめ福岡メソッド」を実践する前提として、子ども一人一人に「自分は他人に受け入れられている価値のある人間である」という自分自身に対する基本的信頼感を育むことや、「自分があるがままに受け入れてくれる先生や友達がいる」という安心感のある学級基盤づくりが大切です。

そのために指導者は、「どの子もチャレンジする自分でありたいと願っている」という子ども観に立ち、一人の子どもの努力や成長を認めること、一人の子どもの努力や成長をみんなで喜び合える風土を耕すことが大切です。 ▶P44 「目標志向アプローチ」



(2) 鍛えること、ほめること

「鍛える」といえば、過度の鍛錬や精神修養的な活動を課すことで、子どもの力を引き出そうとする関わり方をイメージする方もいるかもしれません。しかし、そのような関わり方は、子どもの活動意欲を引き出す点において弱さがあり、たとえ、活動がうまくいったとしても、結果として指示待ちで、他律的な子どもに育ってしまうおそれがあります。



「鍛ほめ福岡メソッド」でいう「鍛える」とは、子どもがチャレンジしたくなる状況をつくり、子どもをその気にさせる工夫を指します。そして、その気になった子どものチャレンジを見守りつつ、最小限の支援と言葉かけによって、チャレンジを諦めさせない、見放さない配慮を指します。

「ほめる」といえば、「とにかく、たくさんほめることが大切」と考える方もいるかもしれません。しかし、「鍛ほめ福岡メソッド」でいう「ほめる」とは、「ほめることで終わり」とせず、「ほめることを始まり」ととらえ、ほめることを通して、努力ができる自分や、やればできる自分への手応えを感じさせ、更なる意欲を引き出すことをねらう行為を指します。したがって、その子の、どのような姿を、どのような言葉でほめるのか、また、ほめたことによって、次への意欲を引き出すことができたかまで見届けることを大切にします。

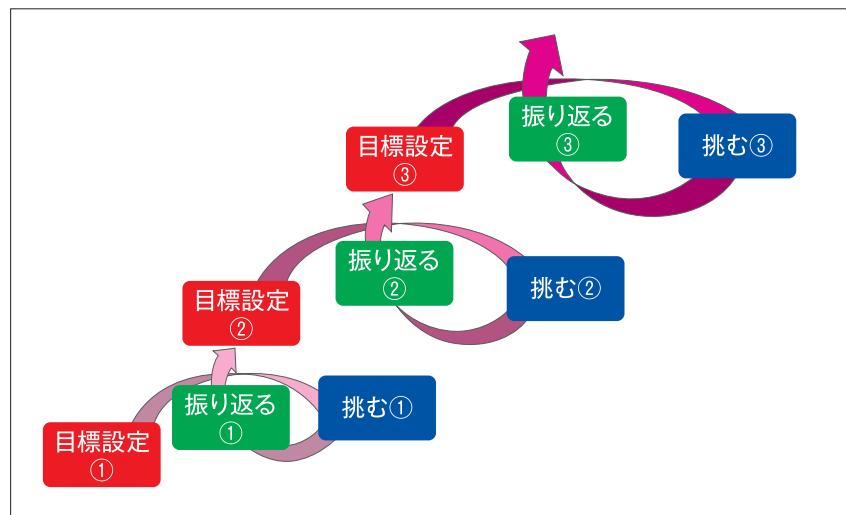
「鍛ほめ福岡メソッド」は、「鍛える」と「ほめる」ことをつなげ、「どのようにして子どものやる気を引き出し、チャレンジをさせるのか。チャレンジのプロセスをどのようにほめ、次の目標へつなげるのか。」という点を大切にする指導方法であり、子どもに自律的に努力する習慣や周囲に対し自分の役割や責任を果たす習慣が身に付くまで、関わり続ける指導方法です。



(3) 「目標設定」「挑む」「振り返る」活動の繰り返し

「鍛ほめ福岡メソッド」は、「目標設定の活動」「挑む活動」「振り返る活動」が繰り返されるところにその特徴があります。

その際、新たに設定された目標は、右の図のように、最初に設定した目標よりも、高まっていることが望まれます。また、設



定の主体も徐々に指導者の手から離れ、子ども自らが設定することが望れます。

なお、テーマによっては、「目標設定の活動」から「振り返る活動」までが1サイクルで終わる場合もありますが、成功体験を活かして新たなテーマを設定させ、次のチャレンジへと導くことが大切です。また、小学校から高等学校まで、更に家庭や地域でも、チャレンジできる環境を整え、子どもに少しでも多くの成功体験を遂げさせることが大切です。

多くの成功体験を遂げた子どもは、自ら目標を設定し、その達成のために努力を重ねることが習慣化され、自律的に成長するための原動力となる人格的資質が育成されます。

2 「鍛ほめ福岡メソッド」推進のために

(1) 「鍛ほめ文化」の耕しを

「鍛ほめ福岡メソッド」では、「目標設定の活動」「挑む活動」「振り返る活動」をサイクル化していますが、子どもにとっては、自分一人だけで目標達成に向けて努力を続けることは、難しい側面があります。なぜなら、私たちが思っている以上に、子どもは友達や保護者、教師等、身近な他者からの影響を受けやすい存在だからです。

例えば、子どもが「一年間で読書100冊」という目標を設定したとしても、まわりの友達や保護者の「そこまで頑張らなくてもいいのじゃない?」という言葉一つで一気にやる気が萎んでしまう場合もありますし、「よし、お母さんも読書にチャレンジしてみようかな。」という言葉一つで、更なるやる気が引き出される場合もあります。

したがって、学校だけではなく、家庭や地域等の場においても、切磋琢磨しながら努力することの楽しさを感じさせたり、努力を続けたプロセスそのものを肯定的に認め合ったりするような風土を耕していくことが大切です。

このような地道な取組を通して、いわゆる「鍛ほめ文化」が醸成され、根付いていきます。



「鍛ほめ文化」の中で育った子どもは、「目標達成に向けて努力をすることが当たり前であること」や「努力をすることが楽しいこと」、「友達の励ましによって自分の力が引き出されること」や「自分の言葉には友達のやる気を引き出す力があること」、そして「お互い切磋琢磨することは楽しいこと」などを知らず知らずのうちに学んでいきます。

(2) 子どもの状況に応じた目標設定を

子どものチャレンジしたい気持ちを引き出し、目標達成に向けて努力をすることの楽しさを味わわせるためには、形態を工夫したり、発達段階を考慮したりすることが大切です。

形態を工夫するとは、目標設定の主体を個人やグループ、学級等使い分けることを指します。

発達段階を考慮するとは、読書や運動、家庭学習等の共通テーマの下、自分や自分達にあった目標を個人やグループ、学級等で設定させることからスタートし、次第に、その子の興味・関心に応じたテーマ（部活動やボランティア活動、趣味や特技を伸ばすことや、資格試験を受けること等）へと移行させることを指します。

ここで、共通テーマの下、自分にあった目標を設定させる場面で留意することを考えてみます。

例えば、読書を共通テーマとした場合、「一年間で100冊読むことを目指したい。」と気持ちを高める子もいれば、「100冊は難しそうだから50冊を。」と考える子がいて当然です。更には、「冊数よりもページ数」を目標とした方が望ましい場合もありますし、「自分は、○○さんのシリーズの本が好きだから、それを全部読みたい。」と考える子がいるかもしれません。そして、読書に全く興味を示さない子がいる場合もあります。

したがって、一律に目標を押し付けるのではなく、子ども自身に個別の目標を設定させたり、子ども自身が目標を設定することが困難な場合は、複数の選択肢を示し、その中から選ばせたりする等の配慮が大切です。

更に、「読書の習慣がない子はいないか」という観点からも子どもの状況を把握し、そのような子がいた場合は、例えば、初めのうちは担任や司書教諭等が、おすすめの本をその子に紹介したり、持ち帰らせたりすることで、読書の楽しさを味わわせ、次第に、その気にさせていく配慮が大切です。



(3) 目指す子どもの姿の具体的なイメージと変容の客観的な把握を

「鍛ほめ福岡メソッド」の実践を通して、具体的にどのような子どもの育ちが期待されるのでしょうか。それをイメージするためには、県教育委員会が作成した「児童生徒理解のための尺度調査ツール【SRT】」の質問項目がヒントとなります。以下、質問項目(資質ごとに並び替え)を掲載します。

資質等	質問項目
自尊感情	わたし[ぼく]は、いくつかの点でみどころがあると思います。
	わたし[ぼく]は、自分のことを積極的に認めています。
	わたし[ぼく]は、友達がやるのと同じくらいにいろいろなことができます。
	わたし[ぼく]は、少なくとも自分がほかの人と同じくらい価値ある人だと思います。
	わたし[ぼく]は、すべての点で自分に満足しています。
規範意識	クラスで自分が受け持ったことは、きちんとします。
	グループの発表で、決められた自分のやるべき仕事や勉強は、必ずやります。
	自分が受け持った係活動や学級の仕事は、きちんとやるほうです。
	授業中は、他の人のじゃまにならないようにします。
	めんどうだと思うときでも、当番の仕事があるときには、それをきちんとやるようにします。
	友達としゃべりたくなったときも、授業中はがまんするようにします。
学ぶ意欲	言われなくても苦手な勉強をします。
	難しい算数[数学]の文章題でも、できそうだと思えば、解けるまでがんばってみます。
	自分で、目標や計画を立てて勉強をしています。
	勉強がいやでも、すぐにやり始めます。
	難しい問題でも、いろいろなやり方を考えてがんばります。
	いろいろなことが知りたいので、学校の勉強だけでなく、家でも勉強しています。
	算数[数学]のテストで、解けなかった問題を先生に聞いたり、調べたりして、わかるまで考えます。
運動や スポーツ	国語の難しい問題でも、ねばり強く考えるほうです。
	スポーツなどして体をきたえています。
	運動やスポーツをすることが好きです。
生活習慣	食事は1日3食食べます。
	規則正しい生活をしています。
	困難なことにも忍耐強く挑戦できます。
	長い時間(朝の会などで)立っていられます。

これらの質問紙調査を、実践の前後で実施することにより、子どもの変容を客観的に把握することができます。

したがって、指導者は「この実践で特に子どものどのような資質等を高めたいのか」を明確に持つことが大切です。例えば、子どもの「学ぶ意欲」を高めたいと考えた場合、前項の「学ぶ意欲」の欄にある質問項目について、肯定的な回答をする子どもが増えることを具体的な目指す姿として想定するのです。このことで、指導者はどのような資質等を重点的に育てたいのか、一貫した実践をすることができます。

また、この調査を、年度始めに行うことで児童生徒理解の補助資料にもなります。

なお、これは県教育センターのホームページ「児童生徒理解のための尺度ツール【SRT】」からダウンロードできます。

※SRTについての問い合わせは、県教育センターではなく、県教育庁教育振興部義務教育課までお願いします。

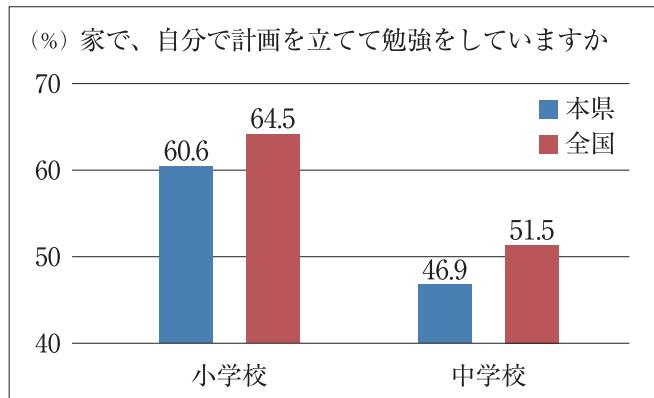
3 「鍛ほめ福岡メソッド」が必要とされる背景

(1) 本県の子どもの自律的な成長を

右のグラフは、平成29年度全国学力・学習状況調査の「児童・生徒質問紙」において、「家で、自分で計画を立てて勉強をしていますか」という設問に対して、「している」「どちらかといえばしている」と肯定的な回答をした子どもの割合です（公立学校対象）。

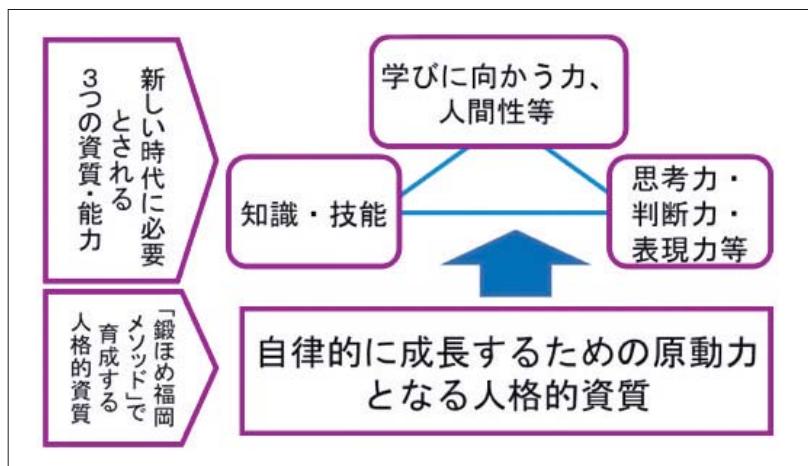
この調査結果から、本県の子どもは、

全国と比べ、自律的に学習をする習慣が身に付いている割合が低いことが分かります。



このような実態等を踏まえ、本県において、学ぶ意欲や自尊感情等を育成することが特に大切であると考え、教育に関わる全ての指導者等が共有する指導方法として、「鍛ほめ福岡メソッド」を推奨しています。

なお、新学習指導要領では、新しい時代に必要となる資質・能力の3つの柱として①何を理解しているか、何ができるか（生きて働く「知識・技能」の習得）②理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成）③どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養）を示しています。右の図のように、「鍛ほめ福岡メソッド」で育成する人格的資質は、これら3つの資質・能力を支える基盤といえます。



(2) 指導の構えや指導方法の共有を

例えば、部活動の対外試合で、これまで敵わなかった相手チームに勝つことができた、という場面。顧問の先生や応援に来ていた保護者等はどのような言葉で子どもをほめるとよいでしょうか。「たくさん練習したから勝てたね。」と子どもの努力に要因を求めるのか。または、「今日は、相手チームはコンディションが悪かったようだ。」と外に要因を求めるのか。それとも、そこまでこだわる必要はないのか。



このような何気ない一コマでさえ、私たち大人は無意識に多様な言葉を子どもにかけています。そして、ほめること一つをとっても、子どもの意欲を引き出す言葉、萎めてしまう言葉があるのです。

ほめることを通して、子どもの意欲を引き出すポイントは、成功の要因を本人の努力に求めることです。よって、先ほどの部活動で相手チームに勝った時にかけるとよい言葉は「たくさん練習したから勝てたね。」となります。これは心理学の「原因帰属」という考え方に基づいています。

▶P47 「原因帰属」

逆に、努力が結果に結び付かなかった場合は、「あんなに努力したのに負けたのは、あなたたちに才能がないからだ。」と能力に要因を求めるのではなく、「練習方法で見直す点はないだろうか。」と努力の仕方に要因を求めることが有効です。

このような心理学の知見を「鍛ほめ福岡メソッド」は取り入れています。教育に関わる全ての指導者等が、ここに示されている子どもと向き合う構えや指導方法を拠り所とすることで、子どもの自律的な成長が更に促進されることが期待されます。

Fukuoka Kita-Home Method

きた
鍛ほめ
実践3ヶ条

**【鍛える】
目標設定の活動**

**【鍛える】
挑む活動**

**【ほめる】
振り返る活動**

第1条

達成目標を引き出し、子どもをその気にさせよう

目標を設定させる際は、振り返った時に、「できたか、できなかつたか」が分かる達成目標で設定せらるることが大切です。

達成目標とは、例えば「本を一年間で100冊読む」というように、数値化等により子どもにも指導者にも達成イメージを共有できる目標を指します。その際、「なぜ、この活動をしたいのか。」「この活動でどのような成長ができるのか。」等問い合わせ、その活動に取り組む価値(目的意識)を引き出すことが大切です。 ▶P45 「期待×価値理論」

目標設定の活動のポイント

その1 やや困難な目標を

自分にとってやや困難な目標を設定させることが大切です。なぜなら、やや困難な目標には、子どもの挑戦意欲を引き出す力があるからです。

やや困難な目標を設定させるためには、憧れとなるモデルを示したり、試しの活動を位置付けたり、これまでの自分の取組を振り返らせたりすること等が効果的です。

例えば、久山町立山田小学校は、「めざせ！漢字検定合格」の取組において、プレテストを実施し、その結果を基に、親子でチャレンジする漢字検定の級を設定させています。

その2 期間や期限を明確に

達成目標を設定するときは同時に、「いつ」「いつまでに」という期間や期限を明確にすることが大切です。

このことで、子どもは、達成に向けての計画を立てやすくなり、見通しを持って活動を展開することができます。

達成目標の具体例

◆30種類ほどのテーマから個人毎にテーマ及び認定基準を設定する月隈キラキラジュニアマイスター制度
【福岡市立月隈小学校】

◆昨年度の読書記録に基づく、新年度の読書目標冊数の設定
【朝倉市立馬田小学校】

▶P36 実践事例、P50 実物資料
◆年4回の定期考查前家庭学習合計時間の設定と保護者との共有目標化
【小竹町立小竹中学校】

ここに注意

目標が「読書をがんばる」や「運動をがんばる」等の行動目標に留まると、具体的にどこまで達成したいのか、子どもにも指導者にも不明確なまま活動することに陥ります。このような場合、子どもとのやりとりを通して、具体的な達成目標へと導くことが大切です。

**【鍛える】
目標設定の活動**

**【鍛える】
挑む活動**

**【ほめる】
振り返る活動**

第2条

プロセスを記録させ、子どもの活動を支えよう

「鍛ほめ福岡メソッド」では、「目標達成に向けてどのようにチャレンジを続けたのか」というプロセスに着目します。▶P44 「目標志向アプローチ」

したがって、子ども一人一人が、目標達成に向けてどのように取り組んでいるのか、子ども自身にも指導者にも分かるように、記録をつけさせることが大切です。このことで、指導者は、子どもがつけた記録等を拠り所にしながら、適切な支援をすることができます。

挑む活動のポイント

その1 フォーマットの工夫を

記録をつけさせる際は、自身のチャレンジをその都度振り返らせる「今の振り返り」と、一定期間のチャレンジを振り返らせる「今までの振り返り」とを分けて考えることが大切です。

「挑む活動」においては「今の振り返り」が主となるますが、フォーマットには、「今の振り返り」と「今までの振り返り」の欄、及び定期的に担任や保護者のコメント欄があると効果的です。

その2 プロセスの共有化を

記録を本人のみに留めないことで、切磋琢磨する風土が耕されますが、その際、友達との比較で優劣をつけるのではなく、お互いが自己目標の達成に向けて努力していることを認め合う風土を耕すことが大切です。

例えば、県立古賀特別支援学校(知的障がい教育部門、中学部)では、「ラダー運動」を朝の活動として位置付けていますが、廊下に「ラダー運動掲示板」を設置し、各自の頑張りの状況を学級や学年で互いに認め、ほめることができるよう工夫しています。▶P53 実物資料

記録方法の工夫の具体例

◆日々の活動と一週間の活動を振り返る欄や教師や保護者コメントの欄を設けた「きたほめノート」
【「運動鍛ほめ」実践校】

▶P37 実践事例、P51 実物資料

◆読書活動の充実に向け語彙力等を日常的に高める「視写プリント」
【みやま市立山川中学校】

▶P50 実物資料

◆毎日の家庭学習時間等を書きこませる独自ノート「夢に向かって」
【県立宗像高等学校】

▶P39 実践事例

ここに注意

活動がうまくいっていない場合、他者からの評価がないと、活動意欲が低下することがあります。したがって、指導者は、互いに記録を見合う場や、教師や保護者、地域の方からのコメントをもらう場など、小刻みに設定することが大切です。

**【鍛える】
目標設定の活動**

**【鍛える】
挑む活動**

**【ほめる】
振り返る活動**

第3条

プロセスをほめ、子どもの心に火を灯そう

指導者は、目標達成に向けて努力を重ねたプロセスと結果をつなげて評価することが大切です。「目標が達成できてよかったね。」「良い成績がとれてよかったね。」と結果のみをほめるのではなく、「ねばり強く取り組んだから、目標が達成できたね。」「今まで以上に家庭学習に取り組んだから、良い成績がとれたね。」等、プロセスと結果をつなげて評価することが、次への意欲を引き出すことにつながります。 ▶P44 「目標志向アプローチ」

振り返る活動のポイント

その1 原因をプロセスに

チャレンジの結果、目標を達成することができなかった時は、うまくいかなかつた原因を努力や努力の仕方に求め、達成のための方法を子どもと一緒に考えることが大切です。

このことで、たとえ目標を達成できなかつたとしても、子どもの次への意欲を引き出すことにつなげることができます。 ▶P47 「原因帰属」

その2 目標設定の活動との連動を

自分や自分達の活動を振り返らせる際に、「次どうするか」ということも話し合わせると、子どもの問題意識は連続・発展します。

例えば、川崎町立川崎小学校では、スポコン広場のエントリーを継続的に行うことにより、自分達の記録の伸びを確かめながら、次の目標を引き出しやすくする工夫をしています。

次の活動につなげる具体例

◆年3回の「河内っこ体力証成果報告会」による自身の体力向上を自覚できる場の設定

【北九州市立河内小学校】

◆終業式等の場を活用した取組状況の賞賛や「友小家庭教育便り」の発行による取組状況の発信

【上毛町立友枝小学校】

◆「課題研究発表会」後の生徒の感想を掲載した学校便りの発行

【県立筑豊高等学校】

▶P52 実物資料

ここに注意

目標が達成できなかつた時、本人の能力にその原因を求めてはいけません。このような評価を受けた子どもは、「うまくいかなかつたのは、自分に能力がないからだ。頑張っても、どうせ、次もうまくいかないだろう。」と考えるようになるおそれがあります。

Fukuoka Kita-Home Method

きた
鍛ほめ
実践Q&A

「鍛ほめ福岡メソッド」の設定時間について①



通常行っている授業において、「鍛ほめ福岡メソッド」の考え方を取り入れた実践をすることは可能ですか。

可能です。

ただし、あくまでも、各教科等の目標を達成する上で必要な活動であることを踏まえることが必要です。その上で、以下のような活動が考えられます。



例えば、小学校において、スポコン広場に学級として取り組む場合、学級活動で、スポコン広場のチャレンジ種目やその目標を集団決定する活動は、「鍛ほめ福岡メソッド」の「目標設定の活動」といえます。

目標達成に向け、スポコン広場のチャレンジ種目の練習を朝の活動や休み時間に行う活動は「鍛ほめ福岡メソッド」の「挑む活動」ですが、教育課程外となります。

また、学級活動で、自分達の活動を振り返ったり、次の目標を話し合ったりする活動は、「鍛ほめ福岡メソッド」の「振り返る活動」といえます。

例えば、中学校において、読書活動に取り組む場合、国語科の読書単元の学習との連動を図り、国語科の授業において、読書の楽しさを感じさせた後に、目標を話し合う活動は、「鍛ほめ福岡メソッド」の「目標設定の活動」といえます。

設定した目標に沿って、朝の活動や家庭学習等で各自読書を進める活動は「鍛ほめ福岡メソッド」の「挑む活動」ですが、教育課程外となります。

また、帰りの会の時間を活用して、自分の読書の足跡を見つめ直し、今後の読書活動に向けて新たな目標を設定する場合、「振り返る活動」は教育課程外となります。

例えば、高等学校の公民科において、地球環境問題を学習する場合、「地球環境問題にはどのようなものがあり、その原因となっているものは何か理解しよう」と《共通目標》を提示し、進度計画表等により全体の見通しを持たせた上で、例えば各自、「持続可能な社会についてレポートを作成する」といった目標を設定させる活動は、「鍛ほめ福岡メソッド」の「目標設定の活動」といえます。

設定した目標に向け、自ら選定したテーマを長期休業中の課題として追究したり、レポート等に表現したりする活動は「鍛ほめ福岡メソッド」の「挑む活動」ですが、教育課程外となります。

また、公民科において、その活動を自己評価によって、自分の目標到達度や

理解度を確認しながら、達成感を高めさせたり、今後の学習課題を見つけさせたりする活動は、「鍛ほめ福岡メソッド」の「振り返る活動」といえます。

同様に、特別支援学校及び特別支援学級における指導でも、通常の学級と同じように「目標設定の活動」、「挑む活動」、「振り返る活動」を設定することができます。

子どもの実態によっては、長期の目標は見通しが持ちにくい場合があるので、短期の目標設定をしながら、長期の目標の達成ができる取組になるようするなどの工夫が必要です。よって、一単位時間内に「目標設定の活動」「挑む活動」「振り返る活動」を位置付ける場合もあります。

例えば、体育科においてサーキットコースでの体つくり運動をする場合、まず授業の導入段階において、実際にサーキットコースを回りながら試しの活動を行わせることで、活動の手順を自らつかませたり、できるようになりたいことや、やってみたいことを発表して学習のめあてを設定させたりすることができます。これは「鍛ほめ福岡メソッド」の「目標設定の活動」といえます。

また、授業の展開段階において、繰り返しサーキットコースに挑戦する中にも、段階的に難しくなる場を意図的に設定したり、教師の支援を少しずつ減らしたりすることで、必要な動きを子ども自らが習得していくことをねらいます。これは「鍛ほめ福岡メソッド」の「挑む活動」といえます。

更に授業の終末段階において、頑張ったことやできるようになったことを発表する活動を設定することで、学習への満足感や達成感を持たせることができます。これは「鍛ほめ福岡メソッド」の「振り返る活動」といえます。

これらの活動を位置付ける際に大切なことは、一人一人の障がいの状態や特性等に応じて適切な配慮を行うことです。「教師や友達の模倣が得意」「個別の学習を好む」など、好きな学び方や有効な支援は障がいの状態や特性等によって異なりますので、子どもの実態を把握した上で、個別に具体的な支援を構想することが必要になります。

以上の例をまとめると次のようにになります。

	目標設定の活動	挑む活動	振り返る活動
例) スポコン【小】	学級活動	教育課程外	学級活動
例) 読書活動【中】	国語科	教育課程外	教育課程外
例) 環境問題【高】	公民科	教育課程外	公民科
例) 体つくり【特】	体育科(一単位時間の授業で1サイクル)		



「鍛ほめ福岡メソッド」の設定時間について②



「鍛ほめ福岡メソッド」の設定時間の全てを教育課程外で実施することは可能ですか。

可能です。

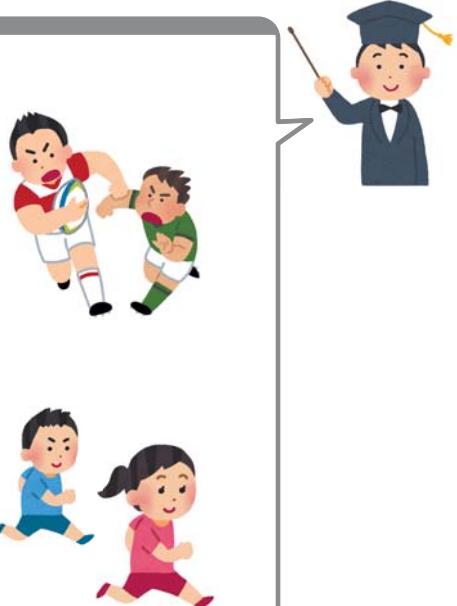
「鍛ほめ福岡メソッド」は、活動や実施時期に応じて多様な時間設定が可能です。内容が教科等の学習に直接つながらない、部活動や家庭学習、長期休業中の活動等では、全てが教育課程外の活動として位置付くこともありますし、帰時間や朝の会、帰りの会の時間だけで実践することもできます。

例えば、「運動鍛ほめ」の実践では、朝の10分間を使ったスロージョギングを年間通して実施していますが、「目標設定」や「振り返り」の活動は朝の会や帰りの会で、「挑む活動」であるスロージョギングは朝の始業前の活動で、といったように、全てを教育課程外で実施しています。

▶P37 実践事例、P51 実物資料

また、中心となる活動は長期休業中に行ったとしても、以下のように、その前後に学級活動等を位置付けると、より効果が高まる場合もあります。

- ・長期休業前に、これまでの長期休業中の自身の過ごし方を振り返らせた上で、長期休業中における家庭学習の目標合計時間を個別に設定させ、達成のための方法について話し合わせる活動。
- ・長期休業後に、家庭学習の取組状況やこれから取り組みたいことなどを話し合わせる活動。



目的意識の必要性と持たせ方について



「目標設定の活動」の際、「なぜ、この活動をしたいのか」という目的意識は、持たせないといけないのですか。また持たせるとしたら、どのように持たせるとよいですか。

発達段階にもよりますが、目的意識を持たせた方が望ましいです。なぜなら、子どもが活動の価値を自覚することで、チャレンジへの意欲が高まるからです。

▶P45 「期待×価値理論」

目的意識を持たせる際には、「なぜ、これにチャレンジするのか。」「これにチャレンジすると、どのような成長ができるのか。」等、子どもに問いかけ、「クラスの絆をもっと強くしたい。」「自分のあきらめない心を強くしたい。」といった言葉を引き出し、活動の目的を自覚させておくことが大切です。



のことにより、子どもはやる気を高め、チャレンジすることができます。また、目的意識を自覚させておくと、たとえ目標が達成できなくても、「あと少しの努力」や「努力の方法を変えること」を示唆することによって、再チャレンジへの意欲を高めやすくなります。更に、「振り返る活動」で目的意識の観点から子どもの育ちを評価することができます。

学級全員による目標設定について



「鍛ほめ福岡メソッド」で学級全員で目標を設定し、その達成に向けてチャレンジする活動を位置付ける際、どのようなことに留意したらよいですか。

「目標設定の活動」において、合意形成までの手続きを丁寧にすることと、子ども一人一人に目的意識を持たせることが大切です。

合意形成までの手続きとは、教師が一方的に活動を宣言するのではなく、例えば学級活動において議題化し、集団決定の場を通すことが考えられます。

目的意識を持たせるとは、例えば、「長縄跳びでクラス全員で3分間で何回を目指すか」を学級活動の議題とした場合、目標回数だけではなく、その回数にチャレンジしたい理由を子どもに語らせ、それらを教師が学級目標とつないで意味付けすることが考えられます。そうすることで、回数の達成だけの意識に留まらず、「あきらめない心を強くしたい。」「友達どうし支え合えるクラスにしたい。」と一人一人に目的意識を自覚させることができます。

また、学級全員やグループによる目標設定に基づく活動は、周囲に対し自分の役割や責任を果たすことの大切さに気付くことができる、という点からも効果があります。



「鍛ほめ福岡メソッド」のサイクルについて



「鍛ほめ福岡メソッド」の図には活動がサイクル化していますが、一つのテーマで「目標設定－挑む－振り返る」活動は何回ぐらい繰り返せばよいですか。

設定する目標は、子どもにとってチャレンジしがいのある、やや困難な目標であることが前提ですが、それを達成するためのサイクルは、活動や発達段階によって多様に考えられます。

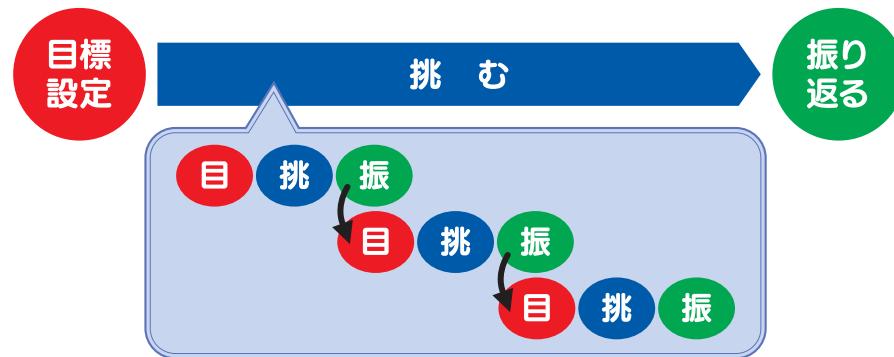


具体的には、大きな目標を長い期間で1サイクルとして設定する場合や小さな目標を小刻みに更新しながら、結果的に大きな目標を達成する場合などがあります。

「遠くて大きな」目標を設定した場合、それを達成するための「近くて小さな」目標を設定することをお勧めします。▶P46 「近接目標」

例えば、「読書一年間で100冊」は「遠くて大きな」目標です。これだけだと、子どもは見通しを持つことが難しく、「そこまでできない。」と不安感を抱くかもしれません。そうならないために、一年間で100冊ということは、一ヶ月に10冊のペース、ということは、一週間で2~3冊のペースで読むと達成できそう、というように、「近くて小さな」目標を設定させるのです。

一週間や一ヶ月という小さなサイクルで自分の読書活動を振り返らせ、それに基づいて、次の週や次の月の目標冊数を決めさせることで、子どもは計画的に「挑む活動」を展開できます。活動のイメージは次のようにになります。



長期休業中の「鍛ほめ福岡メソッド」について



長期休業中に「鍛ほめ福岡メソッド」の考え方を取り入れた活動を行う場合、どのようなことに留意すればよいですか。また具体的には、どのような活動が考えられますか。

「目標設定の活動」までは、学校でしておくと効果的です。

その際、学級便り等を活用して、子どもが設定した目標や目標達成のための計画を保護者や地域の方と共有できるような工夫をすることや、設定した目標を変更できる余地を残しておくことが大切です。

また「振り返る活動」を、保護者や地域の方に委ねると、更に効果が高まります。



なお、地域の行事や社会教育施設のプログラムに参加させる場合は、保護者や指導者が子どもと一緒に目標を設定することが大切です。そして、設定した目標ができるだけ多くの人と共有することで、「挑む活動」や「振り返る活動」において、その子のチャレンジを認め、ほめる言葉かけが多様になることが期待されます。

長期休業中のメニューで子どもに持たせたい目標としては、例えば以下のようなものが考えられます。

- ・「うちどく」を親子で●●冊。
- ・一日のメディア視聴時間、●●●分。
- ・夏休みの家庭学習合計時間、●●●時間。
- ・ラジオ体操に毎日行く。
- ・家族の仕事として毎日●●をする。
- ・子ども会のキャンプで高学年としてリーダー的な役割を果たす。
- ・地域の●●の活動で、低学年のお世話を必ずする。
- ・地域ボランティア活動に●回参加。
- ・インターンシップに●回参加。
- ・学習セミナーに●回参加。



部活動における「鍛ほめ福岡メソッド」について



部活動において「鍛ほめ福岡メソッド」の考え方を取り入れる際、どのようなことに留意すればよいでですか。

部活動は「鍛ほめ福岡メソッド」の考え方そのものが反映されやすい活動です。地区大会出場や県大会出場、コンクール入賞等、具体的な達成目標があり、そのために、チームとして、または個人として実力をつけるため、チャレンジを繰り返すことができる練習の場や、練習試合や試合、コンクールや発表会などの達成場面が多くあるからです。

県内の多くの部活動の指導者が実践している「部活動ノート」は、優れた取組であるといえます。

なぜなら、このノートを通して指導者は、本人の努力や内面の育ちを見取り、それに基づいた具体的な支援や評価ができるからです。また、部活動を通して感じたことや考えたことなどをノートに記述するという行為そのものが、子ども自身にとって、技能の向上や心の育ちについて自覚することにつながるからです。

部活動は勝敗や優劣がはっきりする側面があります。だからこそ、指導者は「結果ではなく、プロセスを」「他者との比較ではなく、その子の成長を」という構えで、子どもと関わることが大切です。 ▶P44 「目標志向アプローチ」



特別支援学校及び特別支援学級における「鍛ほめ福岡メソッド」について



特別支援学校及び特別支援学級で「鍛ほめ福岡メソッド」の考え方を取り入れた取組を行う場合、留意すべき点は何でしょうか。また、各教科等において、どのような活動が考えられますか。

各学年の各教科等の内容だけでなく、自立と社会参加に向けた力を育てる取組になるようにすることが重要になります。そのためには、子ども一人一人の障がいの状態や特性、生活年齢、学習状況に十分配慮して目標設定を行い、計画・実施することが大切です。

子どもが理解できるように具体的に手順を示すとともに、「何のために取り組むか」という目的もしっかりと理解させることも大切です。その上で、常に「達成可能な目標」をスマールステップで設定したり、もてる力を最大限発揮させ、「できるようになったこと」を称賛して、さらに可能性を広げたりする工夫が必要です。

各教科等に関しては、全てにおいて「鍛ほめ福岡メソッド」の考え方を取り入れた活動が可能です。大切なことは、教科等の内容について十分な実態把握を行い適切な目標設定がなされること、目標と「達成しつつあること」や「達成できたこと」が可視化されることなどがあります。また、子どもの実態によっては、長期の目標は見通しが持ちにくい場合があるので、短期の目標設定をしながら、長期目標の達成ができる取組になるようにするなどの工夫が必要です。例えば、以下のような活動が考えられます。

- ・国語の音読の学習で、読む量を1行から2行、3行と増やしたり、漢字の読み仮名を減らしたりして、質的な難易度を変えて挑戦させ、結果をグラフ等に表現し、向上心を高めさせる活動。
- ・生活単元学習で、行事単元を設定し、「七夕まつり」を教師と行った経験を生かして、「秋まつり」は、自分たちで企画するなど、発展的な目標に挑戦させる活動。
- ・視覚障がいのある子どもへの自立活動の時間の指導(单眼鏡の指導)で、ピント合わせのタイムを測ったり、時間内に読む(見る)ことができる文字等を増やしたりして、記録に残し、日常生活でも積極的に使用する意欲を高めさせる活動。



社会教育分野における「鍛ほめ福岡メソッド」について①



社会教育分野において「鍛ほめ福岡メソッド」の考え方を取り入れた体験活動等は可能ですか。
また可能であるならば、どのような活動が考えられますか。

可能です。体験活動等については、以下のようなものが考えられます。

① 子どもたちを対象とした県事業としての体験活動等

- ・地域学校協働活動事業における学習支援及び体験活動
- ・通学合宿推進事業における生活体験活動



② 社会教育施設における体験活動等

ア 社会教育総合センター、英彦山青年の家、少年自然の家「玄海の家」

- ・人間関係づくりレクリエーション
- ・自然体験キャンプ
 - 野外炊飯、テント設営、キャンプファイヤー、施設外ビバーグ、登山、トレッキング、ウォークラリー、磯遊び、釣り体験、カヌー・ヨット体験、ネイチャーゲーム、等
 - ・ものづくり体験
 - おやつづくり、科学実験、間伐材クラフト体験、流木楽器づくり、漂着物アートづくり、等
 - ・農業体験
 - 田植え体験、稻刈り体験、イチゴ狩り体験、等
 - ・ボランティア体験
 - 森林・河川調査、植樹、クリーン作戦、等



イ 県立図書館、県立美術館、九州歴史資料館、青少年科学館

- おはなし会、子ども図書館員体験、スクールミュージアム、歴史教室、文化財めぐり、科学工作、サイエンス教室、星空教室、等

【留意点】

社会教育は子どものやる気を最も大切にします。子どものやる気と指導者のやる気が一つになって、大きな学びを生み出す教育です。そのため、地域における学びが子どもたちに伝わらなければ、大きな学びは生み出されません。つまり、指導者は、学びを生み出す仕掛けをつくるとともに、「鍛ほめ福岡メソッド」の指導方法を地域に周知する必要があります。

地域の人材や団体とのネットワークを使って、この取組が広がる仕掛けをつくることが大切です。県の事業である「地域学校協働活動事業」には、コーディネーターがいます。コーディネーターに相談することも有効な手立ての一つです。

また、県立青少年教育施設（社会教育総合センター、英彦山青年の家、少年自然の家「玄海の家」）には、「鍛ほめ福岡メソッド」の考え方を取り入れたプログラムが準備されています。

社会教育分野における「鍛ほめ福岡メソッド」について②



県内の青少年教育施設において、「鍛ほめ福岡メソッド」の考え方を取り入れた体験活動を行う場合、どのようなことに留意すればよいですか。

次の4点に留意することが大切です。

① 目的と対象を明確に

「何のために」、「誰に対して」、「どのような効果」を得たいのか(身に付けさせたいのか)を指導者側が明確にすることが大切です。

体験活動は「体験を通じて何らかの学習が行われることを目的として、体験するものに対して意図的・計画的に提供される活動」であり、特に社会教育においては、教育的な目的や効果を考慮して活動を進めることが大切です。

② 参加しやすい雰囲気づくりを

青少年教育施設では、子どもが集団の中で役割を担い、他の参加者と協力して様々な活動を行います。また目的に応じて、異年齢による活動も考えられます。そのため、例えば、まず小さな集団ができるゲームから始め、次第に大きな集団ができる簡単なゲームなどを行うといった、子どもにとって参加しやすい雰囲気づくりを行うなどの工夫が大切です。なお、多くの青少年教育施設では、参加しやすい雰囲気づくりのためのプログラムが準備されています。

③ 決められた期間や子どもの実態に応じた目標設定を

青少年教育施設における体験活動の多くは、一日や一泊二日、長いものになると五泊六日を超えるものなど、一定の期間が決められ、その中で様々な体験プログラムが実施されます。したがって、決められた期間に応じたそれぞれのプログラムにおいて、子どもが目指すべき達成目標を設定しましょう。その際、可能な限り、参加している子どもの実態に応じた、少しだけ難しさを感じる目標を指導者とともに設定することが大切です。

④ 各活動における目標に沿った適切な評価を

設定した目標は指導者だけでなく、子ども同士でも共有し、活動中(「挑む活動」)における子ども同士の相互評価につなげることが大切です。相互評価は子どもの次なる活動への意欲を引き出す力があります。また、活動中(「挑む活動」)、活動後(「振り返る活動」)において、子どものチャレンジのプロセスを認め、適切に評価することが大切です。目標に向かって子どもがどのように取り組んだのか、達成できたのかなど、指導者はその過程を丁寧に確認し、時には叱咤激励しながら、次の活動への意欲につながる評価を心がけることが大切です。



家庭学習における「鍛ほめ福岡メソッド」について



家庭学習において、保護者にも「鍛ほめ福岡メソッド」の考え方沿った関わりをしていただきたいのですが、どのようなことに留意すればよいですか。

次の3点に留意すれば保護者の協力を得やすくなります。

① 学校と家庭との連携した取組であることを明示する。

「家庭学習強化週間」のように期間を決めた取組を各家庭に知らせる際、例えば、学校長とPTA会長の連名で、「家庭学習強化週間」のお知らせを出す等の工夫が考えられます。学校と家庭とが連携した取組であることを明確に示すことで、保護者の意識が高まることが期待されます。



② 目標を保護者と子どもで決めるなどを促す。

学校としての目安を示した上で、「家庭学習強化週間」等における家庭学習の目標時間を、保護者と子どもで決めさせると効果的です。このことで、保護者にとっても、家庭学習の目標時間が「自分事」となりやすくなり、子どもへの励ましや、賞賛の言葉が増えることが期待されます。

③ 記録を蓄積できるファイル等を準備する。

「家庭学習強化週間」等の記録(設定した目標や、実際の数値)を振り返ることができるようなファイル等を準備すると効果的です。このことで、保護者にとって、我が子の積み上げの状況が把握しやすくなり、子どもの事実に沿った賞賛や励まし、助言等がしやすくなります。



なお、このような協力をしていただく前提として、学校としてはPTA総会等の場を活用し、保護者の方に「鍛ほめ福岡メソッド」について説明する場を設け、趣旨や指導方法について周知することが大切です。

また、“新”家庭教育宣言(PTAが主体となり、学校と連携・協働して行う家庭教育支援の取組)の中に、「鍛ほめ福岡メソッド」の考え方を取り入れた活動を位置付けることで、保護者の方は具体的に「鍛ほめ福岡メソッド」について理解が深まりやすくなります。

「鍛ほめ福岡メソッド」を取り入れた活動で保護者の協力を得るには①



「鍛ほめ福岡メソッド」の考え方を取り入れた活動に保護者や地域の方の協力を得たいと思っているのですが、どのような工夫が必要ですか。

まずは、「鍛ほめ福岡メソッド」で取り組んでいる活動を保護者や地域の方に知ってもらうことが大切です。具体的には「共に行う」「見てもらう」「聞いてもらう」「読んでもらう」等の方策を使い分けたり、組み合わせたりする工夫が考えられます。



「共に行う」とは、例えば、学校行事で鍛錬登山をする場合、保護者や地域の方にも一緒に登山をしてもらうような工夫が考えられます。このことで、自然に、子どもを励ましたり、ほめたりしてくださる保護者や地域の方の温かな支えを得やすくなります。

「見てもらう」とは、例えば、「長縄チャレンジ」に取り組んでいる場合、その様子を授業参観の折に見てもらうような工夫が考えられます。このことで、家庭でも取組について話題が広がり、子ども達のやる気が一層引き出される可能性が高まります。

「聞いてもらう」とは、例えば、高等学校において卒業までに一資格取得を目指とする場合、入学説明会やPTA総会等の折に、この取組の考え方や期待される子どもの成長、保護者としてかけてほしい言葉等について説明するような工夫が考えられます。このことで、保護者の方にとっても、三年間の高校生活のゴール像の一つを描くことができ、目標達成に向けて我が子を励ましたり、ほめたりすることができます。



「読んでもらう」とは、例えば、ノート検定に取り組んでいる場合、学校便りなどで、目的や計画等の説明に加え、その裏面を活用し、手本となるノートを掲載するような工夫が考えられます。このことで掲載されたその子の励みになることはもちろん、保護者の方にとっては、掲載されたノートを一つの拠り所にしながら、我が子に対して、具体的な賞賛やアドバイスすることができます。

「鍛ほめ福岡メソッド」を取り入れた活動で保護者の協力を得るには②



学級便りなどで、「鍛ほめ福岡メソッド」の取組を紹介し、「ご家庭でもほめてください。」と伝えているのですが、「具体的に何をしたらよいのか分からない。」と戸惑っている保護者の方には、どのように働きかけるとよいですか。

家庭の協力を得るために、説明会や学校便りなどを通じて保護者に協力を求めるることは有効な手立ての一つですが、子どもによっては背景に様々な事情を抱えている場合もあることを踏まえることが大切です。



なかには、ほめるタイミングやどのような言葉でほめるとよいのか、戸惑ったり、苦手だと感じたりしている保護者もおられます。

そのような場合、取組の意義や目的だけではなく、家庭において協力していただきたい内容等について説明をする機会を個別に設けることも必要です。

その際、担任から「このようにしてください。」と一方的に伝えるのではなく、まずは、「ほめたいのだけれど、どのようにほめたらよいのか分からない。」等、保護者の方が担任に気軽に話せるような関係づくりに努めることが大切です。

そのためには、日々の学校生活でみえる、その子の育ちを個別に伝えることや、例えば「鍛ほめ福岡メソッド」の実践で「目標設定の活動」をしたその日に、連絡ノートや電話連絡、家庭訪問等で「子どもさんが、このような目標を設定した。」「そのとき、このような前向きな言葉を発していた。」等のエピソードを保護者の方に伝える配慮が大切です。



このように考えると、日頃から担任はアンテナを高く張って、子ども一人一人の言葉や動きをキャッチできるように観察しておく必要があるといえそうです。

家庭における日常的な言葉かけのポイントについて



保護者として、子どもへの普段の言葉かけで気を付ける
ことがあれば教えてください。

「鍛ほめ福岡メソッド」では、「自律を促す指導」を大切にしています。

「自律を促す言葉かけ」のコツは、できるだけ子ども自身が選んだり決めたりする場面をつくるようにすることです。

下図の言葉かけの場面で説明すると、左側の図は「他律的な言葉かけ」です。大人が、命令や過去の行動に対する質問をしており、子どもが自分の意思で決める部分がありません。これに対し、右側の図は「自律を促す言葉かけ」です。大人が、今後の行動に対する質問をしており、子どもが自分の意思で決める部分があります。



例1



そろそろ
ゲームを止めて
宿題をしなさい。



今日は、
何時から宿題を
始めるの？



ううん…。
(いますぐ
止められない…)



ええっと、
5時半から
始めるよ。

例2



なぜ、
こんなことを
したんだ！



これから、
どうしようと
思っているんだ？



だって、…。
(理由を言ったら、
また怒られる…。)



これからは、
きちんと確かめて、
○○をするよ。

右側の図のように、自分の意思で選んだり決めたりする経験を積ませることで、子どもは徐々に自分で決めた計画や行動に責任を持つようになります。それに伴い、大人からほめられたり、認められたりする機会が増え、学ぶ意欲や自尊感情等を効果的に向上させることができます。

家庭における「ほめ方」のポイントについて



子どもをほめることは大切だと思うのですが、保護者として、どのようなことを、どのようにほめるといいですか。

子どもが今、チャレンジしていることに関心を寄せ、子どものほんの少しの成長を認め、ほめることが大切です。

学校便り等をご覧いただき、学校の取組に沿ってほめることも有効ですが、学校の取組に限らず、家庭においても、手伝いや生活習慣等、「小さな挑戦」を乗り越えさせる経験を遂げさせ、そのことをほめることで、子どもの自律的な成長が期待されます。

例えば、「自分で起きる」「靴をそろえる」「手伝いを一つ増やす」等も、子どもにとっては「小さな挑戦」になる場合があります。したがって、そのような視点から、目標を親子で話し合って決め、日常の「小さな挑戦」を見守り、認め、ほめるという一連のサイクルは「鍛ほめ福岡メソッド」の考え方と一致します。

なお、手伝いは、まずは「カーテンを開ける」「テーブル拭く」等から始め、子ども自身に「家族の役に立つ自分」への手応えや喜びを感じさせながら、徐々に少し難しい手伝いに移行させると効果的です。また、手伝いをやり終えた時は、「助かった。」「ありがとう。」等、ほめるよりも、感謝の気持ちを伝えるという構えで、言葉をかけることが大切です。

ちなみに、このような目標設定を唐突に行うと、子どものやる気を引き出しにくくなる場合があります。新年や、学年の始め、誕生日など、子どもにとって節目を意識しやすいタイミングを待って、目標を親子で話し合うことで、子どものやる気を引き出しあやすくなります。



結果がはっきりしているものを子どもが持ち帰った時に留意することについて



通知表や定期テストなど、結果がはっきりしているものを子どもが持ち帰った時に、保護者として気を付けることがあれば教えてください。

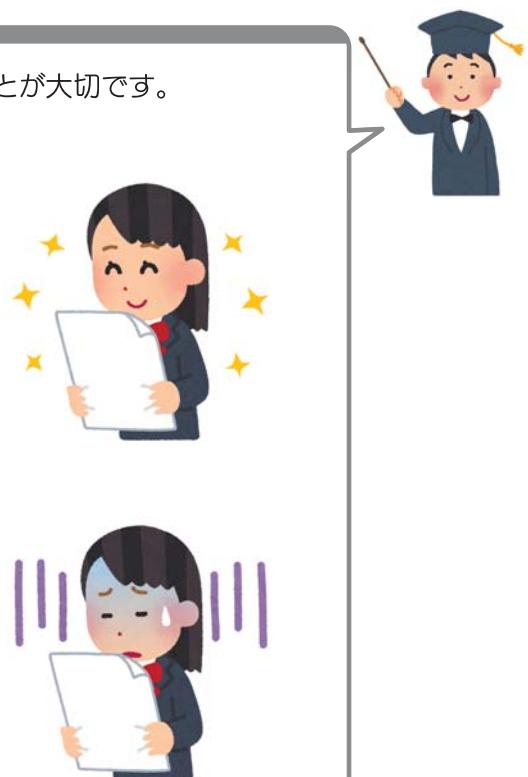
子どもが持ち帰った結果に対して関心を寄せることが大切です。

例えば、定期テストの結果や通知表等を持ち帰り、子どもが保護者にそれを見せようとした時は、「今、忙しいから。」「後でね。」等の言葉は極力控え、すぐに見ようとする姿勢を示すことが大切です。

ちなみに、「後でね。」等の言葉は、「私は、あなたの成長に関心がない」という裏メッセージを送ってしまっているおそれがあるので注意が必要です。

逆に、結果をなかなか家族に見せることができない場合も考えられます。そのような時は、「テストの結果どうだった?」「今日、通知表もらったんじゃない?」等、関心を持っていることを子どもに伝えることが大切です。

仮に、思うような結果ではなかった場合、決して、本人の能力を否定するような言葉をかけたり、兄弟姉妹や知り合いの子どもと比較したりはせずに、「結果は伴わなかったけれど、これまで一番がんばっていたよ。」「もっと効率のよい方法と一緒に考えようか。」等、プロセスを認めたり、努力の仕方について助言をしたりすることが大切です。 ▶P44 「目標志向アプローチ」



Fukuoka Kita-Home Method

きた
鍛ほめ
実践事例

テーマ	「読書」を通した鍛ほめプロジェクト 「[「読書鍛ほめ」 一年次】		
実践校・団体	朝倉市立馬田小学校	対象学年	全学年
ねらいと方策	個人毎の読書量や読書時間の可視化に基づく年間目標の設定、朝の読書活動や読書活動に係る授業づくり等の取組を通して、進んで本を読む習慣を身に付けさせるとともに、学ぶ意欲の向上を図る。		
設定時間	目標設定の活動 学級活動等	挑む活動 朝の活動、学校行事、授業	振り返る活動 全校集会等

目標設定の活動

昨年度の個人の読書量やジャンル、学校や家庭での読書を見直させ、本年度の個人の読書数や読書時間等の目標を設定させました。「昨年は200冊読んだから今年は300冊読みたい。」「必読書30冊を読むことにチャレンジしたい。」等、意欲的な姿が見られました。

挑む活動

・ぐんぐんタイム(「お楽しみ読み聞かせ」「お話し玉手箱」)による読書意欲の喚起

「お楽しみ読み聞かせ」では、児童は、聞きたいお話の教室に行きます。教室に入ってはじめて、どの先生の読み聞かせなのかを知ります。また「お話し玉手箱」では、ボランティアの方の放送による読み聞かせにより、児童は、お話を想像しながら集中して聞くことができ、読書への興味、関心を高めることができました。

・継続的・発展的な読書活動による学ぶ意欲の向上

図書委員会が全校集会で行った「ビブリオバトル」では、人を通じて良い本に出会えるとともに、双方向のコミュニケーションにより、読書の新たな面白さに触れさせることができました。2年生では、集会後「自分たちもやってみたい。」という声が上がり、学級活動において、学校司書と担任とのT・Tによるミニビブリオバトルを行いました。また、「読書郵便」では、その本を紹介したい理由を考えさせることで、自己の読書を見つめ直さるとともに、書く力を高める取組にすることができました。

振り返る活動

馬田小学校では「学びの部」、「運動の部」、「心の部」において、それぞれの取組に対し数値目標を達成した児童を全校集会で表彰する馬田小認定活動を行っています。読書に関しては、読書200冊、300冊、必読書100冊達成等を表彰しています。児童は、読書の記録を振り返ることで、自らの読書の傾向を知り、次の目標を設定しました。

成果等

各取組により、図書館利用や貸出冊数が増加、児童の読書への関心の高まりが見られました。今後は、第1学年から第6学年まで系統立てた図書館の利用指導と授業を関連付けて行うことと、語彙力等と読書活動の関連を究明することが課題です。

本事例から学びたいこと

児童自ら目標を設定できるようにしていることと、教師が付けたい力を明確にして様々な活動を仕組んでいることで、児童の読書意欲の向上が図られている。

テーマ	「運動」を通した鍛ほめプロジェクト 【「運動鍛ほめ」 一年次】		
実践校・団体	志免町立志免中央小学校 久留米市立津福小学校 飯塚市立伊岐須小学校	直方市立直方東小学校 広川町立中広川小学校 苅田町立苅田小学校	対象学年 3年または4年の全学級
ねらいと方策	<p>「鍛ほめ福岡メソッド」を取り入れた運動プログラムの実践を通して、体力とともに学ぶ意欲や向上心を高める。(三年間の取組)</p> <p>一年次においては、無理なく続けることができる運動プログラムの実践を通して、運動の楽しさや心地よさを実感させ、運動の習慣化を図る。</p>		
設定時間	目標設定の活動 朝または帰りの会	挑む活動 朝の始業前	振り返る活動 帰りの会等

目標設定の活動

まず、児童の運動への意欲を高めるため、試しの運動をもとに運動の心地よさや楽しさを発表させ、運動を楽しみながら続けることの大切さや運動することのよさについて話をしました。その上で、「きたほめノート」に個別の目標(めあて)を設定させました。その際、自分にとって、やや困難な目標を設定することや、他者との無理な競争にならないように気付けさせました。

挑む活動

学識者によって構築された運動プログラム(平成29年度「ニコニコペースでのスロージョギング」)を、週3回以上10分間実施しました。児童は、運動プログラムにそって活動を行い、毎回の活動後には、「きたほめノート」に達成シールを貼らせ、簡単な振り返りをさせました。また、教師も共に走ったり、保護者や地域の方が参加する機会を設定したりすることで、多くの人に、励まされたり、ほめられたりしながら、運動を楽しむことができるような場を設定しました。

振り返る活動

心と体の状態の気付きを大切にした一週間の振り返りを「きたほめノート」に書かせ担任及び保護者もコメントを記入するようにしました。更に、週の始めには、今週のめあてを記入させ、活動が連続・発展するように工夫しました。

成果等

「きたほめノート」の活用は、自ら次の目標を設定する際に有効でした。また、記録が蓄積されることにより、達成感を味わうことができました。また、学識者が構築した「スロージョギング」を運動プログラムとして取り入れた結果、運動経験が少ない児童でも無理なく目標設定し、運動を続けることができました。

本事例から学びたいこと

「きたほめノート」の活用により、周りの大人(教師や保護者)が活動を把握し取組のプロセスをほめることができため、児童の活動意欲の向上に効果を発揮している。このことが有効に作用し、児童は、継続的に運動に取り組むようになっている。

テーマ	地域ボランティア活動プロジェクト		
実践校・団体	福津市立福間東中学校	対象学年	全学年
ねらいと方策	地域が募集したボランティア活動において多くの地域の大人と活動を共にしながら、役割を果たし、活動を最後までやり遂げることを通して、自尊感情を高める。		
設定時間	目標設定の活動 総合的な学習の時間	挑む活動 土日祝日、及び長期休業中	振り返る活動 活動当日、学級活動

目標設定の活動

教師は、ボランティア活動への意欲を高めるために、過去のボランティア活動の内容を示したり、地域の方から頂いた賞賛の手紙を紹介したりしました。生徒は「自分もチャレンジしてみたい」という気持ちを高め、地域ボランティアの情報をもとに、自分が参加するボランティアを選択し、「何をどこまでやり遂げるか」といった観点から自分の目標を具体的に設定しました。

挑む活動

教師は、できる限り生徒自身で解決できるように、本当に困ったときだけ支援するように、予め地域の方に依頼しました。また、生徒の活動に関心を持ち、ほめてもらえるように、活動場所に幟を掲げたり学校便り等で紹介したりしました。また、生徒に、活動の前に地域の方から地域ボランティア活動について話を聞かせることによって、地域に対する思いや活動の意義を再認識させました。活動中は、地域の方と会話をしながら取り組み、困ったことがあれば地域の方の支援を受けながら自分自身で解決しました。生徒は、地域の方が感心されるほど、最後まで活動をやり通しました。



振り返る活動

生徒に自分自身の活動について振り返らせるために、活動レポートを作成する場を設定しました。また、地域の方からの感想や評価などを生徒に伝え、ボランティア達成証を渡しました。生徒は、互いの頑張りを認め合ったり、改めて人の役に立ったことを実感したりして、地域参画の意義や課題について積極的に話し合い、次のボランティア活動について更に挑戦してみたいと意欲を高めました。

成果等

ボランティア活動の中で多くの経験を積み、大人にほめられたことで自尊感情の高まりがみられました。今後も、継続的な取組とするための環境づくりが必要です。

本事例から学びたいこと

ボランティアの意義や価値等を考える場を教育活動に計画的に位置付け、学校全体の取組として継続的に実施しているため、地域にも学校の意向が浸透している。特に「挑む活動」において、地域の方々は、最小限の支援で生徒を見守り、励ましている。

テーマ	夢に向かって		
実践校・団体	県立宗像高等学校	対象学年	全学年
ねらいと方策	学習記録「夢に向かって」を継続的に記録する活動を通して、目標に向かって、主体的に努力を続け、最後までやり抜く強い生徒を育てる。		
設定時間	目標設定の活動 ホームルーム活動	挑む活動 自主活動	振り返る活動 ホームルーム活動

目標設定の活動

各学年における目標とすべき宗高生像を明確化し、一年間の生活スタイルを確立させるために、「夢に向かって」(通称「夢む」)を活用しています。例えば、新たな生活への夢と希望を抱く一方で高校生活について漠然としたイメージしか持っていない1年生には、入学後すぐに卒業生の「夢む」を見せ(進路指導室でいつでも閲覧可)、先輩の目標達成のプロセスや、毎日の学習記録をつけることの意義について説明し、中学校生活から高校生活へのスムーズな移行を促します。また、全学年において学習や部活動などの短期・中期・長期の目標を書かせ、目標達成に向けた見通しを持たせています。

挑む活動

生徒は「夢む」に毎日の学習記録をつけますが、日々感じたこと、悩みや不安なども自由に書き込んでいきます。そのような記録や書き込みに対して、生徒の努力をほめ、次につながるアドバイスを教師がびっしりと書き込むことで、生徒自身が悩みや不安を乗り越えることができるよう支援します。このような関わりを繰り返す中で、生徒の夢に向かう掛けない心を育みます。3年生になると、志望大学名等を「夢む」の表紙に大きく書いたり、夏休み一週間での学習時間合計6,750(ムナコウ)分に挑戦したりする生徒も多く現れます。



振り返る活動

一日の記録や反省だけではなく、一週間の記録や反省を書かせることで、自分を客観的に振り返らせ、次の週の目標を立てやすくしています。毎日続けさせることで、生徒は、過去の自分からの成長を実感でき、自信につながります。この自信が、新たな夢に向かって挑戦する原動力となっています。

成果等

「夢む」を三年間書き続けさせることで、生徒は、目標設定の大切さを理解し、自ら立てた計画に基づき、継続的に努力できる力を高めることができました。

本事例から学びたいこと

先輩が残した「夢む」を一つのモデルとしながら、学校全体として取組むことで、目標達成に向けての日々努力を重ねる学校文化が根付いている。

テーマ	輝りん(きらりん)ピック		
実践校・団体	県立築城特別支援学校	対象学年	肢体不自由 教育部門高等部 全学年
ねらいと方策	自分で設定した目標に継続して挑戦し続けることで、目標に立ち向かう意欲を育てるとともに、達成した喜びを味わわせる。		
設定時間	目標設定の活動	挑む活動	振り返る活動
	特別活動(学部集会)	自立活動又は体育	特別活動(学部集会)

目標設定の活動

11月にオリエンテーションを行いました。まず、昨年度の輝りんピックの動画やポスターを提示し、先輩達が挑戦している姿を見せたり、現在自分たちが頑張っていることを発表させたりすることで、自分の目標を設定しやすくなりました。生徒は、担任の先生と相談しながら、自立活動や体育の学習で取り組んできた課題の中から挑戦したい課題を一つ決め、自己アピールポスターを作成しました。そのポスターを教室前の廊下に掲示し、他学部の生徒や職員、保護者にも知らせることで、生徒の意欲が高まるようにしました。そして、例えば「3m離れたに3分間ボールを投げて何本倒せるか」など一人一人に合った目標を生徒と相談して決めました。



挑む活動

毎回目標に挑戦させた後、記録を表に書かせました。それを基に「この前は3本倒せたね。今日は何本を目標にしますか。」と尋ね、今日の目標を決めさせ、目標を徐々に高めていきました。目標が達成できなかった時も「今日は2本しか倒せなかっただけど投げ方が上手になったよ。」と上手になったことをほめて意欲が高まるようにしました。

振り返る活動

輝りんピック当日は、練習成果を学部全員や保護者の前で発表しました。目標を「5本倒す」と決めていた生徒が1度目の挑戦で3本しか倒せず「もう1回したい。」と要求する場面もありました。後日、学部集会で校長先生から一人ずつ記録証を手渡してもらい、これまでの頑張りを賞賛する場を設定しました。「見事5本達成!応援ありがとう」とアピールポスターに書き込むなど、達成の喜びを共有することができました。

成果等

一人一人の生徒に合った目標を設定すること、二ヶ月の長期計画の中で生徒の体調に合わせて挑戦できるようにしたことなどの工夫で、生徒全員が無理なく参加することができました。また、ポスターを掲示することで、更に意欲的に活動する生徒の姿が見られました。その一方で応援者が増えると不安になる生徒も多いので、輝りんピックの開催時期と発表の仕方を工夫することが課題です。

本事例から学びたいこと

自分の目標設定や目標の可視化、及び、毎回の目標を引き出すための前回の活動の振り返り等が、目標達成に向けて挑戦意欲を引き出すことに有効に作用している。

テーマ	ひこさんパワーアップキャンプ		
実践校・団体	県立英彦山青年の家	対象学年	小学4年～中学3年
ねらいと方策	異なる年齢集団の自然体験活動や生活体験活動において、目標設定の活動、挑む活動、頑張りを認め合う振り返る活動のサイクル化を通して、自尊感情や規範意識、チャレンジ精神を育成する。		
設定時間	目標設定の活動	挑む活動	振り返る活動
	初日、活動の始め	野外調理、登山など	活動の終わり、最終日

目標設定の活動

キャンプに対して意欲的に取り組むことができるよう、四日間を通して、子ども達自身が「自分でできるようになりたいこと」と「友達と頑張りたいこと」について目標設定を行いました。

挑む活動

子ども達は、自分で設定した目標達成に向けて、異なる年齢集団による野外調理などの生活体験活動や登山などの困難克服体験に挑みました。けがに注意して、野外調理を時間内で終わらせたり、全員が山頂まで登ることができるように友達同士で励まし合ったりするなど、目標を意識しながら挑む子ども達の姿が見られました。

振り返る活動

一日の活動の終わりに、振り返りの時間を設け、活動の中で見つけた友だちの頑張りを認め合う活動を行いました。「自分ができるようになったこと」「友達が頑張ったこと」をしおりに書かせ、その内容を班で発表させることで、子ども達は、互いの目標の達成状況と自分の成長を確かめることができました。また、これらの振り返りを踏まえ、「翌日の活動の目標」をしおりに書き込ませました。最終日には、四日間の活動を通して、「自分でできるようになったこと」「友達と頑張ったこと」を振り返らせ、班で出し合わせる活動を行いました。子ども達は、「言われる前に自分から作業することができるようになった。」や「野外調理で、班で役割分担をして活動できた。」等、目標に向かって努力できることや友だちと協力することの大切さを学んだことなど、出し合っていきました。

成果等

「IKR調査(生きる力)(国立青少年教育振興機構)」における事前・事後比較において、「心理的・社会的能力」が5.6ポイント、「德育的能力」が2.3ポイント、「身体的能力」が4.2ポイント増加しています。これは四日間、「目標設定」「挑む」「振り返る」といった活動を繰り返したこと、振り返りの中で互いを認め合う活動や次の日の目標を書き込ませる活動を意図的に位置付けたことが有効であったためと考えます。その一方で、四日間を通じた目標設定の在り方を見直すことや、日常生活へつなぐ新たな目標を設定する場の取り入れ方について検討することが課題です。

本事例から学びたいこと

毎日の「振り返る」活動の中で、目標に沿って、互いに認め合う活動を位置付けたことが、自尊感情や規範意識、チャレンジする心の育成につながっている。

Fukuoka Kita-Home Method

知っておきたい 動機づけの 理論

目標志向アプローチ(エイムズ提唱)

エイムズは、マスタリー目標とパフォーマンス目標を学習者に認知されている状況の特性(学級風土)として位置付け、この観点から両者を以下のように分類しています。

雰囲気の次元	マスタリー目標	パフォーマンス目標
何が成功と見なされるか	進歩・上達	良い成績・高い順位
何に価値が置かれているか	努力・学習	他者よりも高い能力
満足の理由は何か	熱心な取組・挑戦	他者よりも優れた結果を出す
教師の志向はどこにあるか	どのように生徒が学習しているか	どのような成果を生徒があげているか
誤りや失敗はどうとえられるのか	学習の一部	不安を喚起させるもの
何に关心が向けられているのか	学習のプロセス	他者と比較した場合の自分の成績
努力する理由は何か	新しいことを身につける	良い成績・他者よりも優れた結果
評価の基準はどこにあるのか	絶対的基準・進歩	相対的基準

ここで、特に注目すべきことは、努力や失敗の意味が学級風土の違いによって、異なって認識されるという点です。

パフォーマンス目標が重視されている学級では、努力をしないで成功することは「能力の高さ」を暗示するため、最も望ましいこととして意味付けられます。逆に努力をして失敗すれば、「能力のなさ」を露呈することになるので、そのような事態はできる限り避けなければならなくなります。したがって、そのような学級では、自分の能力に自信がない場合、「努力の差し控え」が得策である、と考えるようになります。仮に失敗したとしても「努力しなかったから」という「言い訳」ができ、自尊心を傷つけられる心配がないからです。

それに対して、マスタリー目標が重視されている学級では、努力をすればするほど、学習が深まり、技能が高まるという信念が共有されているため、たとえ自分の能力に自信がない場合でも、努力を惜しまないし、結果よりもプロセスが評価されるため、努力を続けようとする態度が子どもに育まれます。

「鍛ほめ福岡メソッド」を展開する上で、その前提として、安心感のある集団づくりが求められます。そのため教師自身が「学習の結果ではなく、プロセスを」「他者との比較ではなく、その子の成長を」という、マスタリー目標の観点から自らの指導を振り返り、日々の子どもの活動を価値付けることが大切です。



期待×価値理論(アトキンソン提唱)

動機づけを期待と価値との「積」によってとらえる理論の総称を「期待×価値理論」といいます。この理論では「積」として考えられていることがポイントです。つまり、その目標が達成できそうだ、という期待があっても、そのことに全く価値を見いだせていない場合や、逆に、価値は見いだせていても、到底達成できそうにないと思っている場合は、その事柄に対して、チャレンジしようという意欲は低くなる、ということです。

「鍛ほめ福岡メソッド」を展開する際、やや困難な目標を設定させること、及び「なぜ、その活動をしたいのか。」「やるとどんな成長がありそうか。」という目的意識を明確にした上で、チャレンジをさせることを大切にしているのは、この考え方に基づくものです。

したがって、指導者による一方的な宣言のみで強引に活動をさせようとすると、いくら「努力すれば達成できそうな目標」が設定されたとしても、その価値を子どもは感じることができない可能性があり、その結果、子どものやる気を引き出すことは難しくなります。

また、いくら「価値高い目標」であったとしても、「自分には達成できそうにない困難すぎる目標」の場合、やはり、やる気を引き出すことは難しくなります。



参考文献「学習意欲の理論」 鹿毛雅治著 金子書房 2013

近接目標(バンデューラ提唱)

人は、結果として得られる価値に比べ、そのために払う労力が見合わないと感じたときは、行動を控える傾向になります。遠くて大きな目標を提示した際、「そこまでする気になれない。」といった心的負担を感じるからです。

そこで、この労力や心的負担を下げるため導かれた考え方が近接目標です。これは、遠くて大きな、いわゆる遠隔目標へと至る道筋に、できるだけ近くて小さな近接目標を段階的に設定することによって、「それだったら自分にもできそう」という感覚が高まるという、いわゆる「分割払い」の考え方です。



したがって、「鍛ほめ福岡メソッド」で例えば、「一年間で本を100冊読む」という目標を設定した場合は、そのためには「一ヶ月で10冊」「一週間で2~3冊」という近接目標を設定すると、子どものやる気を引き出しやすくなります。

参考文献「やる気はどこから来るのか」 奈須正裕著 北大路書房 2002

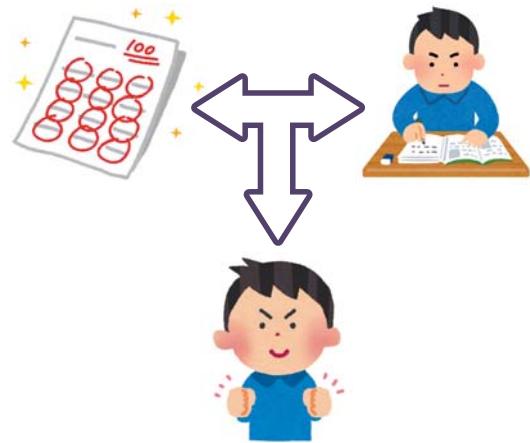
原因帰属(ワイナー提唱)

ある結果について、その原因を何に求めるかを原因帰属といいます。

うまくいった原因やうまくいかなかった原因を何に求めるかによって、そこで感じる感情やその後の出来事に対する期待、実際の行動のとり方などが大きく変わってきます。

例えば、定期テストで良い成績をとった時に、その原因を「自分の努力」と考えた子どもは、「やればできる自分」への手応えを感じ、「十分な努力をすれば、次回も良い成績を得られる」と期待し、意欲を高めます。

逆に、良い成績をとったとしても「たまたま運よくヤマが当たったから」と外に要因を求めてしまうと、せっかくの良い成績が、次への意欲を高めることにつながらず、もったいないことになってしまいます。



原因帰属の考え方で、特に留意すべき点は、うまくいかなかった場合です。

そのような時、本人の能力に原因を求ることは厳禁です。子どもの次へのチャレンジを閉じさせるばかりか、「どうせ、自分は頑張ってもうまくいかない。」と子どもの努力をしようとする気持ちを奪ってしまうからです。

うまくいかなかった場合は、本人の努力や努力の仕方に原因を求め、一緒に考えることが大切です。そうすることで、子どもは、「やり方を変えれば、今度はうまくいくかもしれない。」という期待感を高め、チャレンジを続けることができます。

避けるべき言葉	使いたい言葉
うまくいかなかった時、その原因を本人の能力に求める言葉	うまくいかなかった時、その原因を本人の努力や努力の仕方に求める言葉
【例】 ○こんなこともできない。 ○やっぱりあなたにはできなかつたね。	【例】 ○努力が少し足りなかつたかもしないね。 ○テストに向けての勉強のやり方を変えてみてはどうだろう。 ○この目標はあなたにとっては難しすぎたかもね。

また、上の表の「この目標はあなたにとっては難しすぎたかもね。」という言葉をかける場合は、この言葉で終わるのではなく、どのような目標なら達成できそうか、目標の変更について共に考えることが大切です。

学習性無力感(セリグマン提唱)

失敗体験を何度も繰り返すと、「自分はいくらがんばってもうまくいかない」ということを学んでしまい、その結果、「何をやっても望む結果が得られないのだから、努力するだけ無駄」という考えが形成されてしまう現象を「学習性無力感」といいます。

この言葉が示すとおり、いわゆる「無力感」は後天的に「学習される」ものであって、しかも、それはその人がおかれた環境によって生み出されるのです。



「鍛ほめ福岡メソッド」の実践で、仮に、達成目標をクリアすることができなかった時に、適切な振り返りがなされないまま失敗体験を繰り返すと、「いくらがんばっても、自分はどうせ達成できない」ということを学んでしまい、学習性無力感に陥る危険性があります。

したがって、うまくいかなかった場合は、振り返りの際に「なぜ、うまくいかなかったのか」その原因を本人の努力や努力の仕方に求めることで、やり方を修正、改善するような助言することや、目標そのものの見直しをさせることが大切です。また、そのような助言をするために、本人がどのようにチャレンジしたのか、そのプロセスを記録させておくことが大切です。

参考文献「学ぶ意欲を育てる」 奈須正裕著 金子書房 1996

Fukuoka Kita-Home Method

きた
鍛ほめ
実物資料

「読書ノート」朝倉市立馬田小学校 「視写プリント」みやま市立山川中学校
【読書鍛ほめ】

●「読書ノート」朝倉市立馬田小学校

読書生活をふりかえって		1学期をふりかえって		2学期をふりかえって		3学期をふりかえって	
本をなんさつ読みましたか	62	さつ	本をなんさつ読みましたか	さつ	本をなんさつ読みましたか	さつ	
かりた本は最後まで読みましたか	()最後まで読んだ		()最後まで読みましたか	()ほとんど読んだ	()最後まで読みましたか	()ほとんど読んだ	
	(○)ほとんど読んだ			()とちゅうまで		()とちゅうまで	
	()とちゅうまで						
学年必読書は読みましたか	(○)たくさん読んだ	学年必読書やおすすめされた本は読みましたか	()たくさん読んだ	学年必読書やおすすめされた本は読みましたか	()たくさん読んだ		
	()すこし読んだ		()すこし読んだ		()すこし読んだ		
1. な本のだいめい	どうさんのはくことく	すきな本のだいめい		すきな本のだいめい			
1学期の反省と2学期のめあて	1学期は物語ばかり読んでいたので、2学期はいろいろな種類の本を読み歩いてみる。	2学期の反省と3学期のめあて		1年間の反省と来年度のめあて			

「借りた本をどの程度読んだか」が分かるように、フォーマットを工夫しています。

学期の反省を基に、次の学期のめあてを書くようにしています。また、この振り返りノートは、次の年度の目標設定の際にも用いられます。

●「視写プリント」みやま市立山川中学校 ※実際のプリントと自己評価欄の位置、大きさが違います。

自己評価	視写課題
③スピード ②正確さ ①丁寧さ	視写課題
3 3 3 2 2 2 1 1 1	視写課題
評価	視写課題
3 3 3 2 2 2 1 1 1	視写課題
コメント	視写課題
スピード 正確さ 丁寧さ	視写課題

全員が無理なく取り組むことができるよう、ふりがな付きの小学生新聞のコラムを視写課題にしています。新聞は、図書館で閲覧できます。

出典「朝日小学生新聞」

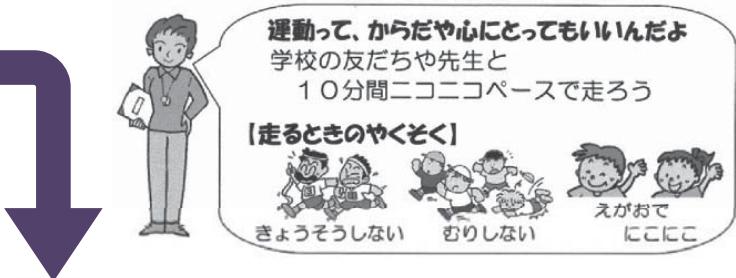
生徒会学習委員会の取組です。評価の観点は、「丁寧さ」「正確さ」「スピード」です。改善に向け、地域のボランティアから評価とコメントをしていただいている。

読書活動を充実させるためには、様々な視点からのアプローチが必要です。朝倉市立馬田小学校は「読書ノート」を、みやま市立山川中学校は小学生新聞のコラムを課題にした「視写プリント」を全校的に活用しています。

「きたほめノート」

志免町立志免中央小学校 直方市立直方東小学校 久留米市立津福小学校
広川町立中広川小学校 飯塚市立伊岐須小学校 荏田町立荏田小学校

【運動鍛ほめ】



今週のめあて かかずあきらめずに友だちと話しながら走る。

[運動した日]

① 9月26日 火曜日 [朝・中・他]	④ 月 日 曜日 [朝・中・他]
② 9月27日 水曜日 [朝・中・他]	⑤ 月 日 曜日 [朝・中・他]
③ 9月28日 木曜日 [朝・中・他]	毎週3回以上「10分運動」めざそう

運動のふり返りで花をさかせよう

今週、運動してみた感想

「たけんシールがばれてやがった。」

おうちの人から (嬉しいと思えました)
先生から (いはや、話して楽しめた)

スロージョギングをしたその日に、観点に即してできたところにシールを貼らせてています。このことで、子どもは楽しみながら、その日の活動を振り返ることができます。また、一枚に一週間分の記録をつけるので、シールが増えていくことが可視化され、子どものやる気が引き出されます。更に、一週間の振り返りを書かせる欄と、それに対する教師や保護者からのコメント欄があります。このことが、更なる意欲を引き出すことにつながるとともに、教師も保護者もその子の取組のプロセスを把握することができます。

「課題研究」生徒実践発表会案内及び発表会後の学校便り

【県立筑豊高等学校】

課題研究生徒実践発表会

課題研究は、専門科目の学習のまとめです。自分が設定したテーマに沿って学習をすすめていきます。毎年、12月にはユメニティのおかたで発表会を実施します。



平成28年度
「課題研究生徒実践発表会」
12月10日(土) 13:00~
ユメニティのおかたにて!!
入場無料です。ぜひ見に来てください

販売実習

「課題研究」の一環として、直方市惑田の明治屋産業びっくり市にて3年生全員が一日販売実習を行います。



★ 「資格取得(情報)」三年
私は苦手の克服と考查で高得点を取りたいと思い、資格取得(情報)を選択しました。

取得を目指したのは、情報処理検定一級です。勉強の計画を立て、普段の授業の復習のような感覚でひたすら問題を解き、わからない所は先生に聞くなどをして勉強を進めてきました。最初は時間が長く感じていましたが、やっていると短かったです。検定は受かりませんでしたが、苦手科目が克服できたのでよかったです。同じ科目を選択した友達で、合格まであと一点という友達もあり、とても充実した学習がきました。

(直方第三中)

★ 「資格取得(簿記)」三年
私は課題研究発表会では発表者でした。本番に向けて資料を作る必要があり、一人では厳しいと思っていました。しかし、同じ班の人や、担当の先生が協力してください、何とか当日までに合うことができました。私も読む練習をして、聞いている人に伝わるよう、発言できるようになりました。本番はリハーサルよりも人が多くて、人に伝えられているということがブレッシャーになりましたが、練習したことを使え、無事成功しました。私は今回のことでの多くの事を学んだので、そのことをこれから的生活に生かしたいと思います。

十二月十日、ユメニティのおかたにて、「課題研究」生徒実践発表会が行われました。この「課題研究」生徒実践発表会では、三年生の三年間の集大成として、授業の「課題研究」を通して、興味のあることを研究し、その成果や過程を発表します。

商業科

「課題研究」生徒実践発表会

す
ず
か
け

「すずかけ」
平成28年度
No.3

福岡県立
筑豊高等学校

TEL
(0949) 26-0324

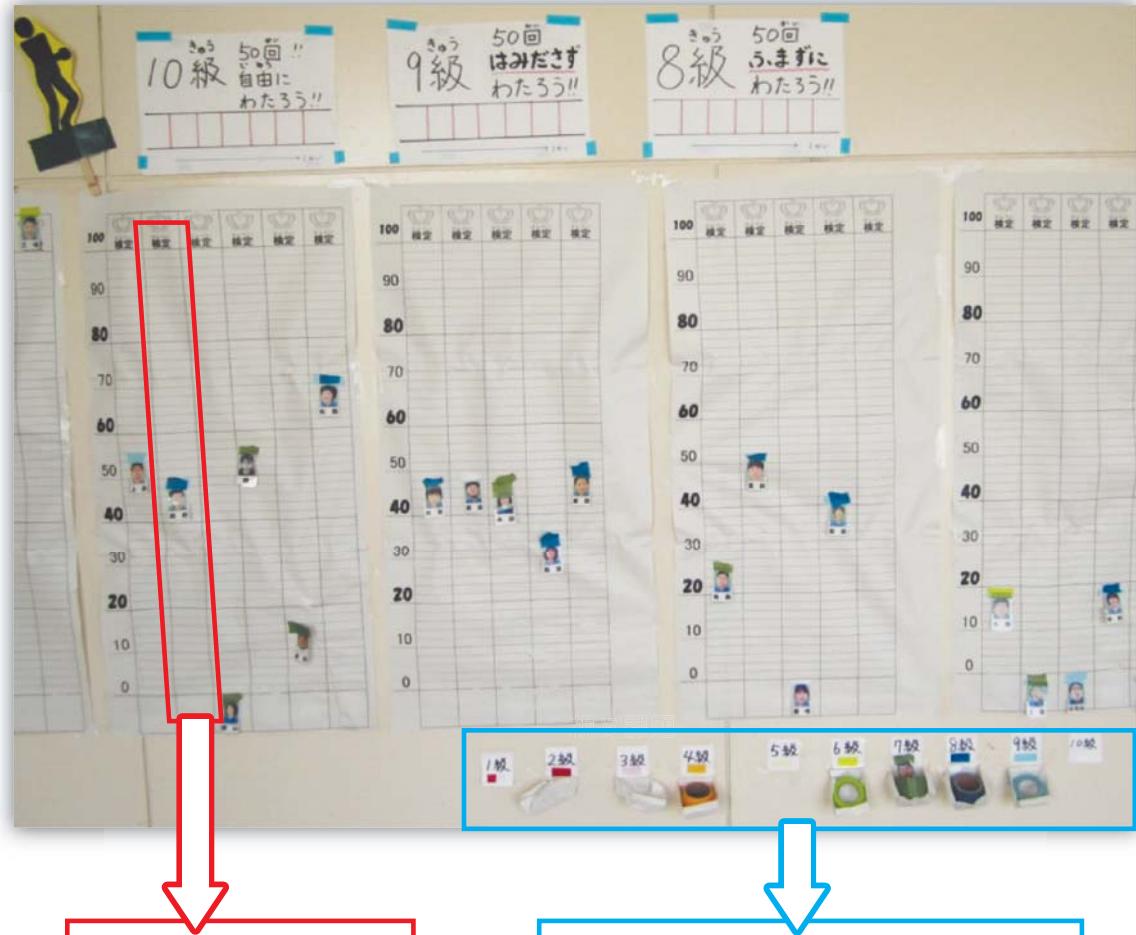
発行年月日
平成29年2月10日

発行：
企画広報部
広報委員会

課題研究学習のまとめを発表する達成場面として「課題研究」生徒実践発表会を位置付けています。学校を会場とするのではなく、地域の公共施設等を会場とすることで、多くの方にその成果を見せていただけるように工夫しています。また、発表会後は学校便り「すずかけ」に生徒の感想等を掲載し、生徒の学びを広く保護者や地域の方に発信しています。

朝の運動(ラダー運動)掲示板

【県立古賀特別支援学校 知的/中学部】



記録が積み上がるごとに自分の写真を上にあげていきます。一番上までいったら、その級の「検定」を受けることができます。

ラダー運動の難易度に応じた「級」が10級から1級まで設定しており、級毎に色分けされています。例えば、9級なら水色、8級なら青色、というように、自分の写真を級の色のマスキングテープで貼らせています。

朝の運動の後、自分の写真の位置を貼りかえさせることで、朝の運動の振り返りができるようにしています。この掲示板は、子どもがよく通る廊下に設置されているので、友達の取組状況を見ながら、お互いに励まし合ったり、認め合ったりすることが日常的に行われます。その前提として、あくまでも自分の目標達成に向けて取り組むよう、言葉かけが日常的になされています。また、教師や保護者も、この掲示版を拠り所にしながら、子どもの取組の積み上げを認め、ほめることができます。

「鍛ほめ福岡メソッド」実践の手引き

発行日：平成30年3月



「鍛ほめ福岡メソッド」シンボルマーク

左右のシルエットは「鍛える人」と「ほめる人」を、中央のシルエットは「周囲に支えられて伸びていく子ども」をイメージしています。そして、「燃え上がる炎のように情熱をもって、勢いよく大きくなる様子」を全体で表しています。